

そのような「礼式」は、武道の種目や時代によって異なるが、日常的な場と特殊な場での「気分」を転換させ、日常世界と非日常世界との間を峻別させる装置として重要であり、遵守すべき行為なのである。「礼式」によっていわば「結界」された「道場」という場では、日常での暴力行為が、相手を通じて自分自身を見つめ、確認、反省する行為へと意味変換がなされるのである。このことは、武道経験者にとっては自明のことであるが、一般の人たちにはなかなか理解してもらえない。

ある知り合いの女性が私にこのようなことを言った。

「私の娘が合気道部に入ったのだけれど、それって愚連隊の人たちがやっているんでしょ」
インテリの彼女の言葉とも思えない質問に、私は一瞬、啞然としたが、気を取り直して合気道の何たるかをとくとくと説明した。しかし、彼女は得心のいかない顔で帰って行った。幸い、数年後にその娘さんが合気道を通じて知り合ったすばらしい男性と結婚したことによる、彼女の合気道に対する偏見はなくなったようである。

そういえば、私が高校時代に柔道部から剣道部へ転部した時、母親から「あんな重たい竹の棒で頭叩かれたら、たわけになる」と忠告されたことを想い出した。大学受験に失敗し、東京に出て合気道をやってみたい、と言ったら、両親は絶句し、兄は烈火の如く怒ったもの

